

社会的自己概念の中央集権的・地方分権的力学の神経基盤の解明

[1] 組織

代表者：溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）

対応者：杉浦 元亮（東北大学加齢医学研究所）

分担者：

杉浦 元亮（東北大学加齢医学研究所）

野内 類（東北大学加齢医学研究所）

佐藤 徳（富山大学人間発達科学部）

研究費：物件費10万円

[2] 研究経過

社会的自己概念すなわち「社会における自己のあり方の理想と現実」についての意識・認識は、成人の社会行動においては生き方全体を規定する重要な因子である。人間の精神的な成熟や加齢を理解し、高齢化社会がもたらす諸問題、特にその社会的な側面への科学的な処方箋を提案するためには、社会的自己概念の科学的な理解が不可欠である。しかし、社会的自己概念の生物学的な基盤についてはこれまでほとんど研究が行われていない。

近年の自己心理学研究は、社会的自己の多数性（「研究者としての自己」「夫としての自己」「父親としての自己」等）に注目している。これらの多数的自己（multiple selves）は意識される客体的な自己（客我=me）であるが、これらと意識する主体としての自己（I）との関わり（力学）については、現在大きく分けて2つの立場がある。一つは中央集権（centralization）的力学、すなわち主体的自己（I）を前提に多数的自己が分化するという William James 以来の古典的な立場である。もう一つは、H. Hermans らの対話的自己論（Hermans & Kempen, 1993; Hermans & Hermans-Konopka, 2010）に代表される地方分権（decentralization）的力学で、主体は多数的自己のいずれかの客我にポジショニングすることではじめて意識化されるという立場である。

本研究の目的は、社会的自己概念における中央集権的力学と地方分権的力学の関係を神経基盤の視点から解明することである。

本年度は、機能的MRIの実験に用いるための1)自己評価質問文の作成・選定と、2)適切な対照課題の作成をおこなうことを中心に作業した。以下の手続は1)について述べるものであり、それぞれの結果は[3] 成果で述べる。

自己評価質問文は、当初自己評価（自尊心）尺度として有名な Rosenberg (1965) の10項目を使用する予定であったが、fMRIでの使用においてさらに20項目程度は同内容の項目が必要になるだろうと考えられた。そこで、従来の自己評価尺度や自己受容尺度を参考にした自己評価項目を51項目作成し、Rosenberg10項目の得点と相関の高い項目を選定するという作業をおこなった。調査参加者は、大学生561名（男性214名、女性347名）であった。

[3] 成果

(3-1) 研究成果

1) 自己評価質問文

結果は表1のとおりで、“私は自分自身を受け入れ認めています”“私は、自分のいろいろな能力について自信をもっています”といった、Rosenberg自己評価項目と相関の高い計20項目を得ることができた。30項目全項目でのクロンバックの α 係数は.881であり、項目間の一貫性が十分認められるものと判断された。

表1 Rosenberg自己評価項目と相関の高い項目

	項目	修正済み項目合計相関	項目が削除された場合の Cronbach のアルファ
Rosen	10項目合計得点	0.893	0.907
B06	私は、自分自身を受け入れ認めています。	0.614	0.874
B09	私は、自分のいろいろな能力について自信をもっています。	0.579	0.875
B10	私は、理想通りではないが、自分というものが好きです。	0.661	0.873
B13	私は、自分に自信をもっています。	0.699	0.872
B17	私は、よい点を多くもっていると思います。	0.589	0.875
B18	私は、自分に対して非常に肯定的です。	0.614	0.874
B25	私は、自分自身を非常に頼もしい人間だと思います。	0.618	0.874
B30	私は、自分の一つの面がためだからといって、自分全体がためだとは思いません。	0.525	0.877
B34	私は、現在の自分が幸福だと思います。	0.552	0.876
B38	私は、自分のことでひげ目を感じたりしません。	0.510	0.877
B03r	何かにつけて、自分は役立つ人間だと思っています。(*)	0.600	0.874
B07r	私は、社会のために何の役にもたない人間だと思っています。(*)	0.549	0.875
B08r	私は、自分自身の中に愛したい部分がたくさんあります。(*)	0.481	0.877
B11r	私は、自分が無力だと思っています。(*)	0.557	0.874
B15r	私は、敬慕者だと思ふことがよくある。(*)	0.521	0.876
B16r	今の私ははがたくて仕方がありません。(*)	0.499	0.876
B19r	自分には、自慢できるところがありません。(*)	0.566	0.875
B32r	私は、自分自身を非常によく責めるたちです。(*)	0.486	0.876
B39r	私は、他の人をとてもらうやましく思います。(*)	0.479	0.877
B05	私は、いろいろな点で人より優れていると感謝しています。	0.451	0.878

2) 適切な対照課題の作成

実験は、①対面式のインタビューで個別水準の抽出・明確をはかり、次いで②fMRI によって個別と全体ごとの自己・他者評価課題を実施し、最後に③記憶課題・評定課題・質問紙の回答を心理評定としておこなうことと計画を立てた。

①個別水準の抽出・明確化においては、領域を“学業”“対人関係”“家族(趣味 or 娯楽)”と設定し、たとえば「学業はうまくやれているか」「どのような感じか」「なぜ」といった問いに基づいて半構造化面接をおこなう。面接では、カードを使って視覚的におこなうことも検討された。個別水準・全体水準間の評定は、a) 全体から学業としての個別水準の評定、b) 学業としての個別水準から家族の個別水準の評価をおこなう、というかたちでおこなわれる。

②個別と全体ごとの自己・他者評価課題の流れは、図1に示すとおりである。1ブロック5つ項目評定を求める。なお、ブロックの順番はカウンターバランスがとられる。課題に含まれる認知処理は図2に示すとおりである。

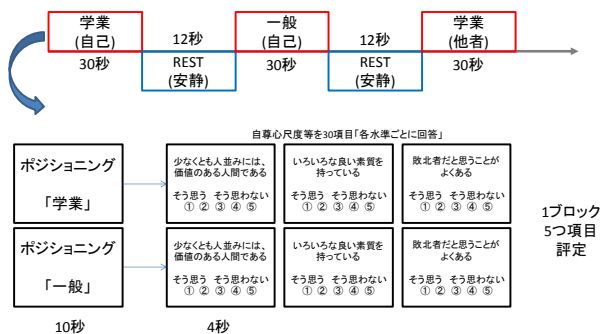


図1 個別と全体ごとの自己・他者評価

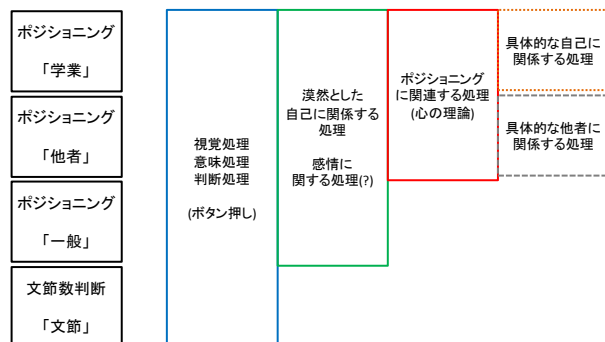


図2 課題に含まれる認知処理

(3-2) 波及効果と発展性など

この共同研究は、社会的自己概念の神経基盤という未開のテーマに、自己心理学者と脳科学者がタッグを組んで取り組む、画期的なプロジェクトと認識している。社会的自己概念処理の「抽象-具体性水準」を反映する脳ネットワークが明らかになれば、社会的自己概念の中央集権的力学と地方分権的力学について神経科学的な説明が可能になる。また、この脳ネットワークの活動を指標として、様々な社会的自己概念処理においてどちらの力学が働いているのかを明らかにしたり、様々な世代において社会的自己概念の発達・成熟の程度や健全性を測定したり、といった研究の展開が可能になり、本研究の大計画も次のステップに進むことができる。現代人の社会的自己概念に関して、自己の全体性の意義の再検討や、そもそも人がなぜ自己の全体性を求めるのかという進化発達の問いも可能であろう。今回の研究結果の予想は難しいが、より具体性の高い自己にポジショニングした場合、自伝的記憶想起に関わることが知られる側頭葉内側や前頭葉内側、内外側の頭頂・側頭連合野が関与する可能性が想定される。これらの領域の自伝的記憶想起における役割はまだ明確に解明されていないので、本研究の成果は自伝的記憶想起の神経基盤研究にも有用な知見をもたらすかもしれない。

[4] 成果資料

平成24年度は研究成果をまだ発表していない。